

日本語右方転移文の構造について：

左方移動分析の観点から*

黒木暁人

東北大学大学院

本稿は日本語の右方転移/後置文を考察し、従来右方移動(Haraguchi 1973、Simon 1989)が関与するとの指摘がなされてきたこの構文が、動詞句前置/残余句移動(Müller 1996、Kayne 1998)等による左方移動の一例として分析されるべきであると主張する。またその際、本分析が先行研究で述べられている諸特性(島の効果等)を説明するだけでなく、作用域解釈、束縛現象等の新たな事実に基づいて経験的に支持されると論じる。帰結として、本分析は左方移動のみを可能な移動操作(右方移動は原理的に禁じられる)と位置づける反対称的統語理論(Kayne 1994)と合致すると述べる。さらに、この理論の下位概念を構成するc統御、主要部後置型言語における目的語の義務的な移動、そしてCP指定部へのTP移動等が日本語の統語構造において機能する可能性も併せて示唆する。

1. 議論の背景

反対称的統語理論(Kayne 1994)による、「語順を決定できる句構造のみが人間言語に許される」との主張は、X'理論で規定された句構造の諸特性を原理的に説明し、方向性パラメータを取り除くなど、その理論的意義は非常に大きい。この仮説の下では、変形生成文法

* 本研究は日本学術振興会及び東北大学 21 世紀 COE プログラム「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」の補助を一部受けて行われている。本稿は、日本言語学会第 131 回大会(2005 年 11 月)及びCLS ワークショップ「日本語の主文現象と統語理論」(2006 年 2 月)における口頭発表に加筆・修正を加えたものである。各発表そして本稿執筆に際し、井上和子先生、長谷川信子先生、佐野まさき先生、上山あゆみ先生、三宅知宏先生、三好暢博先生、高橋大厚先生、高橋久子氏、高橋真彦氏には貴重なご助言、コメントをいただいた。これらの方々に感謝申し上げます。

が仮定してきた移動における方向性の区別を一方（左方）に還元できるか否かが 1 つの経験的論点となる。従って、右方移動分析 (Haraguchi 1973、Simon 1989) が提案されてきた日本語の「右方」転移文(1a-b)の派生を再検討し明らかにすることは、この理論を経験的に検証する上で重要であると言える。(1a-b)では目的語、主語がそれぞれ右方転移されているように見える。

- (1) a. [_{TP} 太郎が e_i 愛している(よ)]、花子を_i ;
b. [_{TP} e_i 花子を愛している(よ)]、太郎が_i ;

本稿は先行研究に基づき、「右方」転移文とかき混ぜ文との統語的な相違点(cf. Saito 1985)に注目しつつ、この構文には右方移動でなく、動詞句前置/残余句移動(Müller 1996、Kayne 1998)等の左方移動のみが関与すると主張する。具体的には、(1a)では目的語の主題化及び残余句 TP 移動の 2 段階の移動を、(1b)では動詞句前置が関与する構造を提示し、この構造が経験的に支持されることを示す。

2. 先行研究

本節では先行研究に基づき「右方」転移文が持つとされる構文特性をかき混ぜ文と比較し、当該構文に関わる操作がかき混ぜと基本的には異なることを観察する。更に、先行研究で提案されている右方移動や多重節構造を仮定した分析における経験的、概念的な問題についても言及する。

Tanaka (2001) は「右方」転移文の転移句にかき混ぜ操作が関与すると指摘している。この主張を支持する現象の 1 つに、「移動」の関与を示唆する島の効果が両者に現われることがあげられる。

- (2) a.*花子に_i 太郎が[先生が t_i 渡した本を]読んだ
b.*太郎が[先生が e_i 渡した本を]読んだ(よ)、花子に_i ;

かき混ぜ文(2a)、「右方」転移文(2b)とも関係節(島)から与格名詞句が抜き出され、それぞれ文頭、文末へ移動しているため容認可能性が落ちている。

一方、「右方」転移文は Haraguchi (1973)が指摘するように主文現象であるという点で、かき混ぜ文とは異なる統語的性質を持つ。

(3) a. 先生が[その本を_i; 太郎が_{t_i} 読んだ]と思っている

b. *先生が[太郎が_{e_i} 読んだ(よ)、その本を_i]と思っている

(3a)のかき混ぜ文では埋め込み節内で操作の適用が許されるのに対し、(3b)の「右方」転移文では当該の名詞句を従属節内で転移することは許されない。また疑問文における疑問詞の転移に関しても両者のふるまいは異なる。

(4) a. 誰を_i; 太郎が_{t_i} 愛していますか?

b. *太郎が_{e_i} 愛していますか、誰を_i; ?

かき混ぜ文(4a)では疑問詞が文頭へ位置することが許されるのに対し、「右方」転移文(4b)において疑問詞が文末へ位置する際、問い返し疑問文(echo question)としては許されるが、通常の疑問文としては許容されない(Haraguchi 1973)。久野(1978)はこの現象を右方転移文の転移句に課せられる意味制約—転移される要素は旧情報(topic)を担う—から説明する。¹更に(5a-b)に示されるように、Radical Reconstruction 効果(Saito 1989)が現われるか否かにおいても両者の統語的振る舞いは異なる。

(5) a. [何を]_i; 太郎が次郎に[_{CP} 花子が_{t_i} 買ったか]尋ねた

b. *太郎が次郎に[_{CP} 花子が_{e_i} 買ったか]尋ねた(よ)、[何を]_i

¹ Wh 句は新情報(Focus)を担う要素である為、この意味的な制約に基づいて文法性が説明される。一方、Haraguchi (1973)はこの現象を統語的に説明することを試みている。

(5a)において文頭に転移した疑問詞は元位置での解釈を許される。一方、「右方」転移文(5b)ではこの解釈は許されない。

次に、この構文の派生に右方移動を仮定する際、経験的に問題とされる点について考察する。Abe (1999)は「右方」転移文に生じる量化詞作用域の多義的解釈が、右方移動分析では捉えられないと指摘する。通常その他動詞文(6a)の場合、主語の存在量化詞が目的語の普遍量化詞よりも広い作用域をとる解釈のみが成り立つ。一方、主語の「右方」転移文(6b)は多義的な解釈を持つ。

(6) a. 誰かが誰もを愛している [∃ > ∀]

b. e_i 誰もを愛している(よ)、誰かが; [∃ > ∀, ∀ > ∃]

(7) [_{TP} t_i 誰もを愛している(よ)], 誰かが; [∃ > ∀, (*∀ > ∃)]

作用域解釈が c 統御により決定されるとすると、(6b)は右方移動分析の下で(7)の派生を経ることになり、(7)では派生のどの段階においても「誰も」は「誰か」を c 統御できない。従って多義的解釈は当該の分析では捉えられないことになる。

更にこの構文に右方移動が関わることを疑う論拠として、この構文が「上方制限(Ross 1967)」に従わないことがあげられる。汎言語的に見て、右方移動文において右方移動を経る要素は、その節内からの抜き出しが一般的に制限される。日本語の「右方」転移文の場合、(8)に例示されるようにこの制約が当てはまらない。

(8) 先生が[_{CP} 太郎が e_i 読んだと]思っている(よ)、その本を;

(8)では、基底構造において埋め込み節内に位置する要素が当該の節点(CP)を越えて右方へ移動している。従ってこの事実からも、この構文に右方移動が関与しないことが示唆される。

次に先行分析の1つである削除分析(Kuno 1978、Endo 1996、Abe

1999、Tanaka 2001)を考察する。² この分析では、(9)のような多重節構造を仮定し、2番目の節内においてかき混ぜ、削除等の操作が適用されるとする。

(9) [TP 太郎が pro_i 愛している(よ)], [TP 花子を i [~~TP 太郎が t_i 愛している(よ)~~]]。

(9)では下方節において目的語がかき混ぜられ、TPに削除が適用されている。この分析を採用すると、「右方」転移文を左方移動の一例として分析でき、「上方」制限を考慮する必要がなくなる。一方、「単文」の派生に複数の同一文構造を仮定するため、「説明として余剰的ではないか」との疑問が新たに生じる。よく知られている事実としてかき混ぜ文(10a)ではPBC効果(Fiengo 1977、cf. Saito 1985)が現われる。一方、「右方」転移文(10b)においては、この効果は現われない(Abe 1999、Tanaka 2001)。

(10) a.*[CP 花子が t_i 愛していると]_j 次郎を i [TP 太郎が t_j 言った]

b. [TP 太郎が t_j 言った(よ)], [CP 花子が t_i 愛していると]_j 次郎を i

(11) [TP 太郎が pro_j 言った(よ)], [CP 花子が t_i 愛していると]_j 次郎を i [~~太郎が t_j 言った(よ)~~]

許容される文(10b)は(11)のような2重節構造を仮定すると、下方節が(10a)と同一構造を持つと考えられる為、誤って(10a)と同様の容認可能性を示すと予測してしまう。従って、先行研究では(12)のような3重節構造を仮定し、この現象の分析を試みている。

(12) 太郎が pro_j 言った (よ)、

[CP 花子が pro_i 愛していると]_j [~~太郎が t_j 言った(よ)~~],

次郎を i [CP 花子が t_i 愛していると]_j [~~太郎が t_j 言った(よ)~~]]。

² 削除分析は研究者によってそれぞれ分析に差異が見られる為、注意しなければならない。ここではTanaka (2001)の分析に基づいて議論している。

この構造において2番目の節ではCPが、3番目の節ではCPが移動した後に「次郎を」が移動すると分析される。従って、各節のそれぞれの要素はPBCに抵触することなく派生される為、この文は容認されると説明できる。

しかし、この従属節を伴う「右方」転移文に3重節構造を仮定すると、(13a-b)の「Clause-Mate」効果(Cecchetto 1999)を分析する際に問題が生じる(cf. Abe 1999)。(13b)の構造は(14)に示される。

(13) a.?次郎が先生に[太郎が $e_i e_j$ あげた]と言った(よ)、
花子に_i その本を_j

b.*次郎が e_i [太郎が花子に e_j あげた]と言った(よ)、
先生に_i その本を_j

(14) *次郎が pro_i [太郎が花子に pro_j あげた]と言った(よ)、

先生に_i [~~次郎が t_i [太郎が花子に pro_j あげた]と言った(よ)~~],
その本を_j [~~次郎が pro_i [太郎が花子に t_j あげた]と言った(よ)~~].

(14)において「右方」転移される各々の項は、それぞれ独立した節から抜き出され、「Clause-Mate」として同定され得ない。この点から、多重節構造を用いる削除分析には概念的な問題だけでなく、分析上、経験的な問題もあることが伺える。

以上、本節では(i)かき混ぜと「右方」転移文が異なる統語特性を示す、(ii)作用域解釈・「上方制限」からこの構文に右方移動は関与しないようである、(iii)概念的動機から単節構造を仮定すべきであるということを指摘した。

3. 右方転移文の構造

ここでは「右方」転移文が持つべき統語構造(単節構造を用いた

左方移動分析)を提示する。³ 本稿はこの構文に TP/VP 前置(cf. Müller 1996、Kayne 1998)が関与すると主張する。具体的には(15b)、(16b)が示すように、様態標識である「よ」が様態句(MdP)の主要部として現れ、この指定部に任意の TP/VP が移動すると仮定する。

【主語「右方」転移文】

(15) a.[_{TP} 太郎が[_{VP} 花子を_i[愛している _{t_i]]]}

b.[_{MdP}[_{VP} 花子を_i[愛している _{t_i]]]_j[_{Md} よ][_{TP} 太郎が _{t_j]]]}}

【目的語「右方」転移文】

(16) a.[_{TopP} 花子を_i[_{TP} 太郎が[_{VP} _{t_i}[愛している _{t_i]]]]]}

b.[_{MdP}[_{TP} 太郎が[_{VP} _{t_i}[愛している _{t_i]]]_j[_{Md} よ][_{TopP} 花子を]_{t_j}]}

主語「右方」転移文では(15a)に示されるように、基底構造において目的語が動詞句指定部へ頭在的に移動している(Kayne 1994、Chomsky 2005)。その後(15b)では、動詞句が様態句指定部に移動する。目的語「右方」転移文では(16a)が示すように、対格名詞句の主題化適用後、(16b)において残余句 TP が様態句指定部へ移動する。この構造では、日本語の句構造が主要部先頭であり⁴、動詞句指定部を目的語が占めることに注意しなければならない。また(16b)は表示上、PBC 違反と見なされうるが、本稿はこれを派生に関わる条件として捉える為、不適格な派生とは考えない(Müller 1996)。⁵

この構造を仮定すると操作は全て左方移動と規定され、「右方」転移文が「上方制限」に従わないことは左方移動であることから説

³ 提示した構造(15a-b)及び(16a-b)は、従来 CP としてひとくくりにされていた構造が複数の機能範疇の投射から成り立っているという Rizzi (1997)の提案に基本的に依拠するものである。紙幅の都合により、本稿でこの構造の詳細には立ち入らない(cf. Watanabe 2003)。

⁴ (15b)、(16b)において、様態標識「よ」の後方に転移句が位置することは、この要素に関する限り少なくとも主要部先頭でなければならないことを示唆する。これを一般的に仮定されているように、主要部後置として捉えると、規定の語順は得られないことに注意されたい。

⁵ 2つの移動に関して、それぞれ異なる種の移動/素性(Top 素性、Md 素性)が関与する際には、PBC 違反は生じないと考える。

明される。また、単節構造を仮定する為、削除分析に纏わる問題も考慮する必要はない。ここで、主題化を受ける要素になぜ主題標識「は」が標示されないのか疑問が残るが、本稿においてこの問題は扱わないこととする。

4. 現象の説明

本節では前節で提示した「右方」転移文の構造に基づき、先行研究で観察されてきた構文の諸特性及びこの構造が新たに予測する事実を提示・説明し、(15a-b)、(16a-b)が経験的に支持されると論じる。

4.1. 島の効果、主文現象、疑問詞転移

まず2節で観察した島の効果、主文現象、そして疑問詞転移がどのように分析されるか順を追って見ていこう。

第一に「島の効果」は「右方」転移文が(17a-b)の派生過程を経ることから説明される。

- (17) a. *_[TopP] 花子に_i [_{[太郎が[先生が_{t_i} 渡した本]}] を読んだ]
- b. *_[MdP] [_{[太郎が[先生が_{t_i} 渡した本]}] を読んだ]_j [_[Md(よ)]], [_[TopP] 花子に_i]_{t_j}

(17a)では、右方転移される名詞句「花子に」が関係節内から主題句指定部へ移動し、(17b)において残余句 TP が様態句指定部に引き続き移動する。しかし、(17a)において主題化が適用される名詞句は、関係節（島）から抜き出され島の制約に抵触している。従って容認不可能になると分析される。

第二に主文現象は、様態標識である「よ」が主節のみに現われることから説明できる。益岡・田窪(1989)によると、「よ（ね）」等は直接話法を除き従属節に現われることができない。また Endo (1996)は「右方」転移文においてこの要素が義務的な要素であると

規定する。

- (18) a. 先生が[太郎がその本を読んだ(*よ)]と思っている
b. *先生が[太郎が e_i 読んだ(よ)、その本を i]と思っている
c. 先生が[太郎が e_i 読んだ]と思っている(よ)、その本を i

以上の指摘に従うと、(18a-b)では様態標識が従属節に現われているために容認可能性が落ち、(18c)では主節に現われているために容認可能となると分析されよう。

第三にこの構造の下で疑問詞転移は、Harada (1972)の Wh-Q 制約違反の一例として扱われる。Kayne (1994)は反対称的統語理論の帰結として、日本語のような主要部後置型言語における疑問文では、(19a)に示すように疑問詞句(FocP)の指定部に疑問詞を含む TP が移動すると規定している。この考えが正しいとすると、疑問詞の「右方」転移文は(19a-c)の派生を経ると考えられる(cf. Watanabe 2003、Rizzi 2004)。

- (19) a. [_{FocP}[_{TP} 太郎は誰を愛しています] [_{Foc} か]_{tTP}]
b. [_{FocP2} 誰を i [_{FocP1} 太郎は t_i 愛していますか] t_{TP}]
c. [[_{FocP1} 太郎は t_i 愛していますか] [_{FocP2} 誰を i t_{FocP1} t_{TP}]]

仮説により、(19a)において TP は FocP 指定部へ移動している。(19b)では Wh 句「誰を」が FocP1 内から抜き出され、更に(19c)において、残余句が様態句指定部へ引き続き移動する。この一連の派生を仮定すると、(19b-c)における Wh 句は CP 内部に含まれないと規定される。従って、疑問詞の「右方」転移が許されないのは Wh-Q 制約に基づいて統語的に説明される。

興味深いことにこの派生を仮定すると、「右方」転移文の転移句に課せられる操作が、かき混ぜとは区別されなければならないと規定できる。これを容認可能な疑問文—Wh 句ではなく通常の名詞句

の転移—(20)で見てみよう。

(20) 誰が愛していますか、花子を

(21) a. [_{FocP}[_{TP} 誰が花子を愛しています] [_{Foc} か]_{t_{TP}}]

b. [_{FocP}[_{TP} 花子を_i [_{TP} 誰が_{t_i} 愛しています]]か]

c. * [_{FocP2}[_{TP} 誰が_{t_i} 愛しています] [_{FocP1}[_{TopP} 花子を_i]か]]

(21a)の疑問文にかき混ぜ (TP 付加) が適用された(21b)の構造を仮定しよう。残余句 TP 移動がこれに適用されるとすると、この構造において転移句と疑問標識を分離させることはできず、(21c)の容認されない文を誤って生成することになる。即ち語順(20)を得るためには、(19b)に示すように、転移される名詞句が FocP 内から完全に抜き出されることが不可欠な操作となる。

このように、本分析及び Kayne 流の CP 構造を仮定すると、疑問詞及び名詞句の「右方」転移文は自然に説明される。

4.2. 作用域解釈

次に作用域の多義的解釈(cf.6b)が、提示した構造の下でどのように分析されるか考察する。

(22) e_i 誰もを愛している(よ)、誰かが_i [$\exists > \forall$ 、 $\forall > \exists$]

(23) [_{MAP}[_{VP} 誰もを愛している] [_{Md} よ] [_{TP} 誰かが_{t_{VP}}]]

本稿が仮定する構造は(23)に示される。ここで、一般的な c 統御 (Reinhart 1976)を用いると、「誰も」は「誰か」を c 統御できず、多義的解釈は得られないことに注意されたい。従って、以下では Kayne (1994)の提案する c 統御を用いて分析を試みる。これは(24)に示される。

(24) X と Y が範疇であり、かつ X が Y を排斥し、かつ X を支配する
全ての範疇が Y を支配する場合に限り、X は Y を c 統御する。
(Kayne 1994)

(24)に従うと、指定部を占める任意の範疇の指定部位置から c 統御
することが可能となる。例えば(25)において、一般的な c 統御の下
では *she* が *every* に束縛される解釈が分析され得ない(25)の文法性
を(24)で捉えることができる。

(25) [_{DP} [_{QP} Every girl_i]_j]'s father] thinks she_i's a genius.

(Kayne 1994、cf. Reinhart 1983)

(24)に従えば、(25)の TP 指定部に位置する DP の指定部 *every* から
従属節 TP 内の *she* を c 統御することができる。従って、代名詞が
量化詞によって束縛される解釈(連動読み)は適切に分析されるこ
とになる。これを踏まえ、「右方」転移文における作用域の多義的
解釈(22)を考察する。(23)では、まず基底において「誰か」は「誰
も」を c 統御し広い作用域を取る。次に、提示した構造に基づき動
詞句が様態句指定部へ移動する。(23)では(25)と同様、この位置(動
詞句の指定部)から「誰も」が「誰か」を c 統御し、広い作用域を
取る。このように、本稿が仮定する構造及び Kayne 流の c 統御によ
り、(22)の作用域の多義性は適切に分析される。

さて、上で見た構造及び作用域の解釈が可能であるとすると、以
下が「右方」転移文に生じると予測される。

(26) 動詞句の指定部に位置しない(より深く埋め込まれた)量化
句は、「右方」転移/後置された量化句を c 統御できないため、
広い作用域を取ることができない。

この予測は(27)、(28)の作用域解釈における容認可能性の対照性か

ら支持されると言える。

(27) a. [_{MdP} [_{VP} 司郎にどの手品も教えた]よ]、誰かが。

[$\exists > \forall$ 、*? $\forall > \exists$]

b. [_{MdP} [_{VP} どの手品も司郎に教えた]よ]、誰かが。

[$\exists > \forall$ 、 $\forall > \exists$]

(28) a. [_{MdP} [_{VP} 花子に全ての特産品を送った]よ]、誰かが。

[$\exists > \forall$ 、*? $\forall > \exists$]

b. [_{MdP} [_{VP} 全ての特産品を花子に送った]よ]、誰かが。

[$\exists > \forall$ 、 $\forall > \exists$]

(27b)及び(28b)の動詞句指定部に量化詞が現われる文では、作用域の解釈に多義性が見られる。これに対し、(27a)及び(28a)で普遍量化詞が動詞句内に埋め込まれている文では、存在量化詞に対して広い作用域を取る解釈が得にくい。本分析の下では、例えば(27a)の場合、「どの手品も」は動詞句内埋め込まれている為、「誰か」をc統御できず、基底構造で得られる作用域以外の解釈が得られない説明される。一方、多義的解釈(27b)を許すのは、動詞句指定部に「どの手品も」が位置し、この位置から「誰か」をc統御できることから説明される。

ここで(27a-b)、(28a-b)で観察した事実が先行分析では捉えられないことに注意されたい。例えば(27b)に右方移動を仮定した場合、派生のどの段階でも「誰も」が「誰か」をc統御することはない。また、多重節構造を仮定する削除分析においても、以下の派生過程を経るため事実を適切に捉えることはできない。

(29) [_{TP} *pro*_i [_{VP} 次郎にどの手品も教えたよ]、 [_{TP} 誰かが [_{VP} 次郎にどの手品も教えたよ]

Tanaka (2001)によると、削除分析における2つの節構造は統語的に

互いに独立しており、一方が他方に影響を与えることはないと規定される。これに従えば、どちらの節においても「誰か」は常に「どの手品も」よりも広い作用域の解釈を取ることになり、多義的な解釈は期待されない。仮に上方節内に位置する量化詞が下方節内の量化詞をc統御できるとすると、量化詞の位置に関係なく、当該の要素は「誰か」をc統御すると推察されるため、対照的に(27a)の解釈が分析できなくなる。このように本分析は、先行分析では予測されない作用域の多義性をうまく扱えるだけでなく、新たな経験的事実からも支持される。

4.3. 束縛現象

上記観察が正しいとすると、作用域解釈で指摘したことはc統御に関わる束縛現象においても見られると予測されよう。以下では弱交差、照応形解釈、条件Cの再構築効果を用いて本分析が支持されることを順に示していく。

まず、弱交差について見ることにする。弱交差効果を示す例は(31)に示されるが、これは一般的に(30)に基づいて分析される。

(30) 束縛代名詞は、関係付けられる量化句に A 束縛されなければならない。
(cf. Ruys 2000)

(31) *?Who_i does his_i mother love t_i?

(30)によると、(31)の束縛代名詞 *his* が *who* に束縛される解釈が得られないのは、*who* (CP 指定部) が A'位置を占めており、代名詞を A 束縛できない為であると分析される。日本語の場合、かき混ぜ文に関してこの効果は生じないとされる(Saito 1985)。

(32) a.*その子_iの母親がどの子も_j叱りつけた
b.どの子も_jその子_iの母親が_t叱りつけた

量化詞に操作を適用した(32b)は(32a)とは異なり、「その子」は「どの子」に A 束縛されると考えられ、弱交差効果は現われない。もし、「右方」転移文の転移句に関して、Tanaka (2001)が指摘するように、かき混ぜが関与しているとすれば、(32b)と同様この効果は生じないはずである。対照的に本分析は、目的語量化詞が「右方」転移される場合、目的語が左方移動した後、残余句 TP が様態句指定部へ移動すると仮定する為、TP 内の束縛代名詞は転移した量化詞に A 束縛されず、弱交差効果が現われると予測する。この予測は(33)、(34c)により裏付けられる。

- (33) *_[M_{DP} その子_i の母親が t 叱りつけたよ]、どの子も_i ;
 (34) a.*校長がそいつ_i の下宿からどの子_i も呼び出した
 b.?どの子も_i ; 校長がそいつ_i の下宿から t 呼び出した
 c.*_[校長がそいつ_i の下宿から t 呼び出したよ]、どの子も_i ;

(33)、(34c)において、束縛代名詞が量化詞に束縛される解釈は許されない(弱交差効果)。本分析に従えば、(30)に基づき、束縛代名詞が量化詞に A 束縛されない為であると適切に分析される。一方(繰り返すことになるが)、かき混ぜを仮定すると、束縛代名詞は A 束縛されてしまう為、誤った予測をする。

次に照応形の解釈について考察する。照応形解釈に関して、一般的にかき混ぜ操作は A 移動の特性を示すことが知られている(Mahajan 1990、Tada 1993)。これは(35b)に示される。

- (35) a.*お互い_i の上司が太郎と花子_i を叱責した
 b.太郎と花子_i をお互い_i の上司が t 叱責した

(35b)において、照応形「お互い」は先行詞「太郎と花子」に束縛される解釈を持つ。これは、かき混ぜ(A/A'移動)が適用された先行詞が照応形を A 束縛できると考えることで説明される(束縛条

件 A)。ここで、主語の「右方」転移文に注目しよう。もし、(35a)において主語が転移されるとすると、照応形は A 束縛されず、(35a)と同様容認可能性は悪いと予測される。一方本分析は、主語は移動せず動詞句が様態句の指定部へ移動するため、動詞句指定部 (A 位置) を先行詞が占めれば、Kayne 流の c 統御により照応形を A 束縛する解釈が得られると予測する。この予測は次例から支持される。

(36) [太郎と花子_iを叱責したよ]、お互い_iの上司が

(37) [太郎と花子_iを推薦したよ]、お互い_iの先生が

(36)、(37)の照応形は先行詞「太郎と花子」に束縛される解釈を持つ。これらの例は、動詞句前置が適用された結果、動詞句指定部に位置する先行詞が照応形を A 束縛できることから説明される。

更に目的語の「右方」転移文の場合、本分析では主題化 (A' 移動) を仮定するため、A 束縛される解釈は得られないと予測する。これは(35)、(36)が例示する通りである。

(38) ?*[お互い_iの上司が_t叱責したよ]、[TopP 太郎と花子_iを]

(39) ?*[お互い_iの先生が_t推薦したよ]、[TopP 太郎と花子_iを]

(Mahajan 1997、Abe 1999、cf. Tanaka 2001⁶)

(38)及び(39)において、照応形が束縛される解釈は得られない。これらの事実は、目的語の転移に適用される操作がかき混ぜ (A 移動の特性を持つ) とは異なり、主題化等の A' 移動が関与することを支持すると考えられる。⁷ 以上、この議論が正しい限りにおいては、照応形解釈に関する事実からも本分析は支持されることが分か

⁶ 先行研究での判断は揺らいでおり、Tanaka (2001)は容認可能としている。念のため、数人にインフォーマント調査を行ったところ、これらの例における照応形「お互い」に相互代名詞としての解釈は出にくいという指摘が多かった。

⁷ ここでの議論は TP/VP 移動が再構築されることを前提としている。紙幅の都合により、この再構築効果を示す議論は割愛した。

る。

最後に、条件 C 違反の再構築効果においても、上記と同様の観察が得られることを確認する。

(40) a. **[In Ben_i's box]_j, he_i put his cigars t_j.*

b. *[In the ivory box [that Ben_i brought from China]]_j, he_i put his cigars t_j.*

関係節を含む前置詞句が主題化の適用を受けた(40b)では、関係節を含まない前置詞句に主題化が適用された(40a)とは異なり、関係節内に位置する *Ben* に条件 C 違反の効果は見られない(Reinhart 1983)。Saito (1985)は日本語のかき混ぜ文においても同様の効果が得られると指摘する。

(41) a. **彼_iが友達に[花子が太郎に_i書いたラブレターを]見せた*

b. *[花子が太郎に_i書いたラブレターを]_j彼が_i友達に t_j見せた*

(41a)では、代名詞「彼」が指示表現「太郎」を束縛している為、条件 C 違反の効果が顕現する。一方、関係節を含む目的語にかき混ぜが適用された(41b)では、再構築が適用されるにも関わらず、指示表現と代名詞の間に同一指示の関係が許され、条件 C 違反は回避されている。これを踏まえ、(41b)と同様に目的語が「右方」転移された(42)を考察しよう。

(42) **[彼_iが友達に t_j見せたよ]_j, [花子が太郎_iに書いたラブレター]を_j*
Abe (1999)

「右方」転移文の転移句にかき混ぜが関与しているとする、(42)は(41b)同様、許容される文でなければならない。しかし、事実は異なる結果を示している。対照的に本分析では、様態句指定部を占

める TP 指定部の「彼」が「太郎」を束縛する為、容認されないと適切に分析できる（条件 C 違反）。更に予測として、TP 指定部より深く埋め込まれた代名詞は転移句内の指示表現を束縛できない為、容認可能性が上がることを示唆される。以下の例はこれを支持する。

- (43) a.*恭子が彼_iに[花子が太郎_jに書いたラブレター]を_j渡した
b.[花子が太郎_jに書いたラブレター]を_j恭子が彼_iに_i渡した
c.??[恭子が彼_iに_i(そっと)渡したよ]、[花子が太郎_jに書いたラブレター]を_j
d.*?[彼_iに恭子が_i(そっと)渡したよ]、[花子が太郎_jに書いたラブレター]を_j

(43a)では条件 C に違反する為、代名詞と指示表現の間には同一指標をふる解釈は得られない。一方、かき混ぜ文(43b)では(41b)と同様、条件 C 違反が回避される。「右方」転移文でこの効果を見ると、(43c-d)ではその容認可能性に若干相違が見られる。本分析において(43c)は、様態句指定部に位置する TP 内の代名詞が TP 指定部より深く埋め込まれ、指示表現を c 統御できない為、違反を回避すると説明される。対照的に(43d)は、TP 内でかき混ぜが適用された結果、与格代名詞は指示表現を c 統御できる文頭（TP 指定部）の位置に生じる為、条件 C に抵触し容認可能性が落ちると分析される。

5. 結語

以上本稿では、日本語右方転移文の構造を提示し、この構造の妥当性を経験的に検証した。本分析が正しい限りにおいては、従来述べられてきた右方移動ではなく、TP/VP 移動等の左方移動のみがこの構文に関与することになる。

また本稿は帰結として、提示した派生が右方移動を禁じる反対称的統語理論(Kayne 1994)に合致すると述べ、更に、この理論におい

て重要な下位概念を構成する c 統御、主要部先頭、CP 指定部への TP 移動等が日本語の統語構造において機能しうることも併せて指摘した。

参考文献

- Abe, Jun. 1999. On directionality of movement: A case of Japanese right-dislocation, ms., Nagoya University.
- Cecchetto, Carlo. 1999. Optionality and directionality: A view from leftward and rightward scrambling in Japanese, in *Grant-in-Aid for COE Research Report No. 08CE1001*, Kanda University of International Studies
- Chomsky, Noam. 2005. On phases. ms., MIT.
- Endo, Yoshio. 1996. Right dislocation, *MIT working papers in linguistics* 29: 1-20.
- Fiengo, Robert. 1977. On trace theory. *Linguistic inquiry* 8:35-62
- Harada, Kazuko. 1972. Constraints on Wh-Q binding, In *Studies in descriptive and applied linguistics* 5, 180-206. Tokyo: International Christian University, Division of Languages.
- Haraguchi, Shosuke. 1973. Remarks on dislocation in Japanese, ms., MIT.
- Kayne, Richard. 1994. *The antisymmetry of syntax*, Cambridge, Mass: MIT Press.
- Kayne, Richard. 1998. Overt vs. covert movement, *Syntax* 1, 128-191.
- 久野暉. 1978. 『談話の文法』 東京 大修館.
- Mahajan, Anoop. 1990. *The A/A' distinction and movement theory*, Ph.D. dissertation, MIT.
- Mahajan, Anoop. 1997. Against a rightward movement analysis of extraposition and rightward scrambling in Hindi, In ed., Tonoike, S. *Scrambling*, 93-124. Tokyo: Kuroshio Publishers.
- 益岡隆志・田窪行則. 1989. 『基礎日本語文法』 東京 くろしお出版.
- Müller, Gereon. 1996. A constraint on remnant movement, *Natural language and linguistic theory* 14: 355-407.
- Reinhart, Tanya. 1976. *The syntactic domain of anaphora*, Ph.D. dissertation, MIT.
- Reinhart, Tanya. 1983. *Anaphora and semantic interpretation*, London:

- Croom Helm.
- Rizzi, Luigi. 1997. The fine structure of the left periphery, In ed., Haegeman, L. *Elements of grammar*, 281-337. Dordrecht: Kluwer.
- Rizzi, Luigi. 2004. Locality and left periphery, In ed., Belletti, A. *Structures and beyond: The cartography of syntactic structures, Vol. 3*, Oxford: Oxford University Press.
- Ross, John. 1967. *Constraints on variables in syntax*, Ph.D. dissertation, MIT.
- Ruys, E. G. 2000. Weak crossover as a scope phenomenon, *Linguistic inquiry* 31: 513-539.
- Saito, Mamoru. 1985. *Some asymmetries in Japanese and their theoretical implications*, Ph. D. dissertation, MIT.
- Saito, Mamoru. 1989. Scrambling as semantically vacuous A'-movement, In eds., M. Baltin and A. Kroch, *Alternative conceptions of phrase structure*, 182-200. Chicago, Ill.: University of Chicago Press.
- Simon, Endo. 1989. *An analysis of postposing construction in Japanese*, Ph.D. dissertation, University of Michigan.
- Tada, Hiroaki. 1993. *A/A-bar partition in derivation*, Ph.D. dissertation. MIT.
- Tanaka, Hidekazu. 2001. Right-dislocation as scrambling, *Journal of linguistics* 37, 551-579.
- Watanabe, Akira. 2003. Wh and operator constructions in Japanese, *Lingua* 113, 519-558.

980-8576

宮城県仙台市青葉区川内
東北大学大学院
国際文化研究科

kurogi@gmail.com